

広島大学平和科学研究センター/新潟県立大学共催国際シンポジウム
「混沌とする世界における国際機関の強化ーヒロシマの果たす役割はー」
(第 39 回広島大学平和科学シンポジウム) を開催

広島大学平和科学研究センターは、平成 26 年 11 月 21 日、新潟県立大学と共催にて国際シンポジウム(第 39 回広島大学平和科学シンポジウム)「混沌とする世界における国際機関の強化ーヒロシマの果たす役割はー」を開催しました。

シンポジウムはⅢ部構成で、第Ⅰ部では「戦後国際関係に果たした国際機関の役割」を共通のテーマとして、プリンストン大学の G. John Ikenberry 教授、軍縮会議日本政府代表部前大使の天野万利氏、猪口孝新潟県立大学学長が、これに続く第Ⅱ部では、「混沌とする世界における国際機関の強化」を共通テーマとして、ダラム大学の David Held 教授、法政大学の弓削昭子教授、西田恒夫広島大学平和科学研究センター長が、それぞれ白熱した議論を行いました。



I 部の討論で意見を述べる Ikenberry 先生



II 部の討論で意見を述べる Held 先生

続いて、元国連事務次長の明石康氏による基調講演「日本と世界の当面するチャレンジ」が行われたのち、第Ⅲ部では、「ヒロシマは何ができるのか？」をテーマとして、ヘンリースティムソンセンターの Brian Finlay 上席研究員、広島市立大学広島平和研究所の水本和実副所長、早稲田大学の山本武彦名誉教授、広島大学の川野徳幸教授が議論しました。ヒロシマの声は実は世界に届いているという印象的な報告があった一方、被爆者の声をどのように継承していくべきか、我々の世代の責任として考えていく必要があるとの問題提起がなされました。



元国連事務次長の明石康氏による基調講演



熱い議論が交されたⅢ部の討論の様子

参加者からは「国際機関の第一線で活躍している登壇者の話が聞けて有意義であった」、「ヒロシマがこれから果たしていく役割を深く考える機会になった」などの感想が寄せられました。広島大学平和科学センターは、今後もシンポジウムの開催等を通じて、平和科学に関する研究成果の還元、情報の提供を積極的に行い、広島から世界に平和を発信していきます。